

2013年度
非文字資料研究センター 第2回公開展示

海外神社とは？ 史料と写真が語るもの

期 間：2014年3月25日（火）～3月30日（日）

会 場：サブウェイギャラリー M



公開展示・公開研究会『海外神社とは？
史料と写真が語るもの』について

津田良樹

戦前期に大日本帝国が海外において植民地化した旧台湾・旧朝鮮・旧樺太・旧南洋群島や旧満州国を中心とした中国などの侵略地に日本人は神社を創設した。それらが海外神社である。敗戦とともにほとんどの神社は現地人や日本人自身の手によって破却され、その機能はすべての神社で停止した。その上、海外神社に関する公文書など関係資料類は内地においても、現地においても、日本人および現地人によって意図的に廃棄された場合が多く、そのため、海外神社の様相をますます見えにくくしている。

神奈川大学非文字資料研究センターの共同研究「海外神社跡地から見た景観の持続と変容」は3年間をひと



公開展示の様子 1



津田良樹氏

区切りとした共同研究であり、その最終年度の総括として、『海外神社とは？ 史料と写真が語るもの』との共通の表題で、公開展示・公開研究会を実施した。

公開展示

公開展示は、地域別に「東南アジア」・「南洋群島：北マリアナ諸島・パラオ共和国等」・「台湾」・「朝鮮：韓国・朝鮮」・「満洲：中国東北部」・「関東洲：中国東北部」・「中華民国：中国」・「樺太：サハリン」の8つの地域に分け、古写真・絵葉書・絵画資料・図面などをもとに各地の神社の神社時代の実像に迫るとともに、神社跡地の戦後写真などを対比的に展示することによって神社跡地の景観変容についても考える企画であった。展示は以下の3本柱で構成されていた。すなわち、「①資料の壁面展示、②プロジェクターによるプレゼンテーション、③稲宮康人氏による写真展」である。

①資料の壁面展示では、壁面の都合上、各地域におけ

2013年度
非文字資料研究センター 第4回公開研究会

海外神社とは？ 史料と写真が語るもの —台湾と韓国の事例を中心に—

日時：2014年3月29日（土） 13:00～17:00
会場：神奈川大学みなとみらいエクステンションセンター <KU ポートスクエア >
開会挨拶：田上 繁（非文字資料研究センター長）
趣旨説明：津田 良樹（非文字資料研究センター 研究員）
報告：黄 士 娟（国立台北芸術大学 副教授）
津田 良樹（非文字資料研究センター 研究員）
諸葛 衍（神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科 博士前期課程）
林 承 緯（国立台北芸術大学 副教授）
司会・進行：中島 三千男（非文字資料研究センター 研究員）

る特徴的な事例に絞り込み、その事例について詳細な展示を行った。たとえば、台湾においては昭和造替を中心とした台湾神社（神宮）や神社時代の様相を色濃く残す嘉義神社など、朝鮮においては海外神社の中でも別格の地位にあった朝鮮神宮や神社時代の本殿を韓国で唯一残す小鹿島神社など、満洲においては満洲国の靖国神社に相当する建国忠霊廟などに絞るといえる。このように特徴的な事例に絞ったため、それ以外の神社については紹介できなかった。それを補完するために、その他の多くの神社の古絵葉書を葉書大の画像にして、それらをつなぎ合わせた帯で展示全体を貫き統一感を持たせるとともに、できるだけ多くの神社を紹介することにした。

②プロジェクターによるプレゼンテーションでは、資料展示においては壁面の制約から事例を絞ったため割愛せざるを得なかった現地調査済みの事例

を極力収録することにして、それらについて神社時代の画像と戦後跡地の写真を交互に拡大投影し、両時代の景観の持続と変容を瞬時に体感できるような展示とした。また満洲国建国神廟および台湾神社の立体的復原動画を混えることによって、さらにイメージを膨らませ、理解を助けるように努めた。

③研究協力者である稲宮康人氏による写真展では、昨年度実施した写真展に新たに撮影した南洋群島の都洛神社や関東洲の関東神宮などの写真を追加し、国内神社は省き海外神社に絞って再構成しなおしたもので、カメラマンの眼を通して見た海外神社跡地の景観についての写真展とした。

特徴的な展示としては以下のようなものがあげられよう。奈良の宮大工であった仲 徳治郎氏旧蔵の図面の中から中国（当時の中華民国）に造営された「南京神社」・「徐州神社」や朝鮮に造営された「原州神社」の設計図



公開展示の様子 2



公開展示の様子 3



を仲家から借用し展示することができた。また、辻子コレクションに含まれる大型図版で鳥瞰的に詳細に神社の様子を描いた「官幣大社台湾神社境内之図」や「朝鮮神宮全景図」は原図を添えて実物大で展示した。さらに、池宮城晃氏からは、戦後、中国の軍施設となりペールに包まれていた関東神宮跡地を撮影した写真が提供された。関東神宮跡地の様相については、戦後はじめての公開となった。以上のような公開展示の内容については、事後にはなかったが、記録の意味も含めて2014年度中に図録として刊行する予定にしている。

公開研究会

公開研究会は、中島三千男氏（非文字資料研究センター研究員）の司会のもと、台湾の事例を中心として3名、朝鮮の朝鮮神宮を事例とした1名の報告があった。それぞれの内容は下記のようなものである。

黃土娟氏（国立台北芸術大学副教授）は、「台湾の神社とその跡地について」の題目のもと、台湾へ神社が侵出した戦前期を初期（1895年 - 大正初期）、中期（大正初期 - 1931年満州事変）、後期（1931年満州事変 - 1945年植民地統治終結）に分けて分析し、戦後の変容過程を、神社跡地の用途変更期（1945 - 1964年）、中華文化的観光を目的とした改築期（1964 - 1985年）、神社の文化財指定期（1985年桃園神社事件 - 現在）として解釈し、これらは時間の推移にともなう社会・政治の変化の現れであるとされた。戦前期については「縣社開山神社造営計画図」・「阿里山及阿里山寺境内附近計画図」や阿緞神社・宜蘭神社などの設計図など新出の造営関係図面を駆使したものであり、戦後については芝山岩の登記簿謄本や1960年頃に調べられた神社調査資料を紹介されながらの説明で、極めて説得力のある報告であった（本ニューズレター別稿および共同研究成果報告書『海外神社跡地から見た景観の持続と変容』所収論文参照）。

津田良樹（非文字資料研究センター研究員）は、「台湾神宮の消長と地下神殿」の題目のもと、台湾神社の台湾神宮への改称・増祀、航空機事故による新社殿への遷座・造替の頓挫、そして神宮の終焉に至る台湾神社（神宮）の消長、さらに従来の神社跡地および神宮遷座予定地について古写真や空中写真などをもとに跡地・予定地の戦後の変容について報告した。また、台湾神宮・新化神社・満州国建国神廟・南京神社などに残る地下神殿の諸相についても検討した（共同研究成果報告書『海外神社跡地から見た景観の持続と変容』所収論文参照）。

諸葛衍氏（神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科博士前期課程）は、「解放後の朝鮮神宮の解体とその跡地利用について」の題目のもと、敗戦直後のアメリカの軍政統治が始まるまでの3週間ほどの間に（「権力の空白期」）、朝鮮神宮の社殿は日本人によって解体されたこと。朝鮮神宮跡地すなわち南山は韓国人にとって特別な象徴的意味を持つ地であるため、その後も、時の政権により、さまざまな形で政治的に利用・改変されてきたこと。すなわち、キリスト教関係施設建設、大統領銅像の建設と議事堂工事着手へ、議事堂工事を中止し南山公園化、安重根記念館建設、南山城郭復元というような変遷・経過があるなどの報告がされた。戦後の朝鮮神宮跡地の変容過程を、戦後韓国がたどった政治的・社会的背景と関連させながら分析したもので、海外神社研究に新たな視点を持ち込んだものとして評価されよう（本ニューズレターの別稿参照）。

林承緯氏（国立台北芸術大学副教授）は、「戦後台湾における神社建築の処理政策と金瓜石神社の再利用計画について」の題目のもと、戦後台湾における神社建築の処分政策について、接収した神社遺産を社会救済・公益のために改造利用した時期、石材など廃物利用を前提とした転用期、日台国交断絶後の大規模破壊期に分けて分析された。さらに近年には、文化財保護意識が高まるとともに、神社建築が文化財に指定されるようになり、一歩進めて金瓜石神社では宗教ぬきのお祭りや樽神輿など無形文化も含めて復元・再利用まで行っているとの報告があった（本ニューズレターの別稿参照）。

これらの報告をうけ活発な議論が行われた。黄報告に対しては阿里山神社の場所について、諸葛報告に対しては「皇国国民誓之碑」の建てられた位置についての質問が出された。

津田報告に対しては「地下神殿」という用語についての意見があり、以下のような質疑応答が行われた。○奉安殿の場合は御真影の避難場所を「御神体奉安所」と呼んでいるが、神社の場合、文献上に「地下神殿」という用語が使われている例があるのか。○文献上では「地下神殿」とされる例は確認していないが、防空壕ではいかにも味気ないので、仮に「地下神殿」と称している。○東京の大神社の場合は地下施設を「御宝庫」と呼んでいた事例があり、それは図面で確認できる。○南洋神社では「非常特別神殿」と呼ばれている。文献上には「地下神殿」という用語は確認していないが、御神体奉遷後も元の社殿で従来通り祭祀が行われるよう配慮して造られ

た地下施設であることから「地下神殿」と称してもよいのではないかと考えている。

林報告については神社遺構を多く残す背景となる台湾人の精神・心理がいかなるものであるのかについての質問が出され、また金瓜石神社の復元・再利用に関しては、その是非を巡って熱い議論が戦わされた。主な質疑応答は以下の通りである。○台湾においては神社が破壊されてはいるが、徹底的に壊されてはならず、それどころか再利用も図られている。その台湾人の心理はいかなるものであるのか。○戦後入ってきた外省人は神社のことは直接知らないが、日本のものは即、日本帝国主義の産物とみている。一方、内省人は神道を信仰しているわけではないが、少なくとも敵対するものではないという心理が強いのではないかとと思われる。○宗教を背景としてかつて行われた祭りを、宗教性とは無関係に復元という名の下に新たに再現していくことは、フィールドワーカーである研究者が踏み込んではいけない領域ではないか。また、新たな再現が事後に影響を与える危険があると思われる。にもかかわらず祭りの再現に積極的に取り組む意義についてどのように考えているのか。○当時の祭りを再現するよりも、集落の100年前の歴史イメージを工夫してイベント化することに町おこしの一つの可能性があるのではないかと考えている。このような再現のやり方自体の是非も含めて問題提起としての報告である。

そのほか、海外神社研究や今回の研究会の総括および今後の展望などに関する発言もあった。おもな意見は以下の通りである。

○従来、海外神社研究は植民地における神社政策単色に描かれてきたが、地域、時代によって微細な違いがある。そのように多様な側面があり、その多様性をどのようにまとめていくかが今後の課題であろう。

○戦後神社跡地の変遷をたどる場合、敗戦まもなくの緊迫した時期や国民国家形成期と政治が大きな要因となる時期があった。ところがある時期から文化財保護や博物館が大きな関心となる、すなわち商業主義・資本の問題が大きな要因となる時期があると思われる。跡地利用の文脈のなかでも二つの要因が影響を与えていくというような大きな流れで論じてはどうか。

○従来、神社研究は植民地の侵略戦争における心の支配という視点からのみ論じられてきた。台湾における、政治支配や植民地化問題を棚上げした神社の観光資源化・文化財化の現状は驚くばかりである。とはいえ、韓国・旧満洲（中国東北部）などの地域では観光化の歴史

は台湾とは異なっているであろう、それぞれの地域の民族性や歴史性の蓄積の差が反映すると思われる。それぞれの地域における観光資源化の諸段階を考えてみる必要があるのではないだろうか。

○海外神社の具体的姿を見ればみるほどに海外神社がいかに多様かということが判明し、一律に海外神社ということでは括りにはできないものであることがわかる。一方、海外神社が多様であるということが出発点であるにもかかわらず、国内の神道がたどったのと同様に、海外神社もまた極めて短期間に画一化して行く現実がある。そのことは、日本国内の神社のあり方にもどこかで跳ね返ってくるものである。植民地支配を行った者は、植民地支配を行ったことによって自分の側に跳ね返ってくるものがあるという視点が海外神社研究のなかにも必要ではないかと考える。

いずれにせよ、私からみれば日本人の負の遺産とも思える海外神社が、台湾の文化財や観光資源となり、台湾人の手によって宗教とは無関係にお祭りや神輿の再現が図られ、ゆくゆくは世界遺産登録までも視野にいれているという現実を聞くにおよび、ついにここまで来たかと



中島三千男氏



全体討論の様子



の思いを禁じ得なかった。

台湾の神社とその跡地について

黄士娟



黄士娟氏

台湾における日本時代に数多くの神社が建てられていたが、戦後には多くの神社が取り壊され、あるいは改築がなされるなどの状況に直面した。一部の神社は部分的に保存され、さらには文化財になるケースもあるが、それらは僅かなものに過ぎない。これは台湾における時間の推移に伴う、社会と政治の変化の表れであると理解している。ここでは、戦後から現在に至るまで約70年間における神社跡地を3つの時期に分けて述べる。

1 各地方の需要による用途の変更(1945年～1964年)

1. 神社の撤去

1959年に行われた台湾宗教の調査文献によると、1945年から各地の神社は撤去される運命に直面する。例えば芝山岩神社は1945年に撤去され、芝山公園に改められた。大湖底神社も1945年に、角板神社は1948年に撤去されるなど撤去ブームとなった。

2. 忠烈祠としての使用

1946年台湾各地で忠烈祠（戦没した英霊を祀る寺）を建てるブームが始まった。多くの場合、神社を転用・改築して用いている。例えば台湾最初の忠烈祠（新竹忠烈祠）の前身は桃園神社であった。日本の総理大臣岸信介が参拝した圓山忠烈祠の前身も台湾護国神社である。台南忠烈祠、花蓮忠烈祠、基隆忠烈祠、宜蘭忠烈祠などは、神社にある鳥居、狛犬、石灯籠、参道が多く残されている。

3. その他

台湾宗教調査の文献によると、林内神社は、戦後間も



写真1 圓山ホテルのプール（1958、『台湾画刊』所収）

なく林内公園に改められたが、社務所と宿舎は、斗六六圳水利委員会の事務所と宿舎として使用されるようになった。当時の調査図面によると、本殿、拜殿、社務所、宿舎、手水舎は残されていた。また、1960年に発行された観光雑誌によると、旗山神社は旗山公園に改められたが、建物は取り壊されることなく使用され続けている。

最も注目すべきなのは、圓山ホテルである。古地図と比較対照して見ると、1952年の一期工事の際には台湾神社の敷地を利用し、ホテル本館を神社の拜殿の位置に建て、金竜ホールを本殿の位置に建て、社務所と神饌所間の広場はプールとし、鳥居の外側はテニスコートにした。

2 観光のための改築（1964年～1985年）

1961年、台南市の「台南市名勝古蹟整修委員会」が、歴史が深く鄭氏の遺跡である赤崁楼、安平古堡、延平郡王祠などを修築し、それによって民族精神や国民の気節を高めることができた。これは、我が国の観光事業の政策に協力し、国際的な友誼を増進し、文化交流できるようになることが目標であった。

「台南市名勝古蹟整修委員会」のメンバーである成功大学建築学科の賀陳詞教授は、設計を委任されていた。賀教授は開山神社について、延平郡王は漢民族のヒーローであるので、ローカルな様式は彼の偉大性に相応しくなく、中国の正統を代表する北方宮殿様式に改築にすべきであるとして、この考えを基にデザインし1964年延平郡王祠に改めた。

1. 忠烈祠を北方宮殿様式に改築

戦後、忠烈祠は多く日本時代の神社を転用していた。台湾護国神社であった国民忠烈祠は神社の改築を試みた最初の例であるが、1969年の完成後、これが各地の神社の改築の手本となった。

2. 政府行政命令で神社の取り払い

1972年の日本との断交を機に、1974年に内政部から「台湾における日本統治時代に作られた日本帝国主義の優越感を表現している記念遺跡の撤去要点」を公布し、行政命令として神社を撤去することになった。命令の第一条では日本神社の遺跡を徹底的に取り壊すと明記したので、それまで残っていた各地の多くの神社は撤去された。

3 神社を文化財に指定（1985年～今日）

1. 桃園神社事件

1985年、桃園県政府は桃園神社の忠烈祠の改築計画を立てコンペまで行ったが、それが社会的に注目されると、神社として保存すべきとの声が浮上し、最終的に1987年に修復工事が竣工され、保存されることになった。敷地に設置している記念碑には、「この建物は現在台湾に僅かに残されている、唐朝時代に似ている日本式の建物であるために、かなり珍しい建物だ」と書かれている。

2. 各地の神社を文化財に指定

1987年に戒厳令が解除されたことで台湾史の研究は盛んになり、1990年以後、日本時代に建てられた建物は、相次いで文化財に指定され、1998年にピークに達した。1985年に保存された桃園神社も1994年に県文化財に指定され、各地方に残された神社の遺構も指定あるいは登録されつつある。このことは台湾社会において神社に対する見方が変わってきた証でもある。植民地時代に建てられた帝国主義を象徴する宗教的な建築でも、時間の経過とともに台湾の歴史の一部となり、文化財と見なされて保存されるようになった。

解放後の朝鮮神宮の解体とその跡地利用について

諸葛 衍



諸葛 衍氏



写真2 朝鮮神宮の正殿の跡地に建てられた十字架
出典：ソウル市立大学校博物館から提供

韓国のソウルの南山には、韓半島の神社や神祠の総鎮守として1925年10月15日に官幣大社朝鮮神宮が建てられ、1945年8月15日の終戦まで存在していた。しかし、終戦とともに韓半島では、各地に建てられた日本の施設への放火や略奪などが起こり、神社施設もそれは免れなかった。その代表的な例が国幣小社である平壤神社の放火であると考えられる。そのような事情から朝鮮総督や朝鮮神宮は、神社の処理問題に関する会議を行い、昇神式を行うことを決定し、朝鮮神宮では終戦翌日の午後5時に昇神式が行われた。本報告は、韓国解放後から朴正熙政権期まで、朝鮮神宮の跡地がどのような変遷をたどってきたのかについてである。

終戦とはいえ、朝鮮総督府はその機能を維持し、米軍政統治の始まる1945年9月8日までその機能を果たしていた。この時期は「権力の空白期」とよばれ、この期間中に日本人の手によって朝鮮神宮内宮は解体され空地となった（森田芳夫『朝鮮終戦の記録・資料編第一巻』巖南堂書店 1979年 pp13～14）。

1945年9月9日から米軍政がはじまり、京城音楽学校（ソウル大学音楽大学の前身）が1945年12月頃、米軍政の許可を得て朝鮮神宮の外宮の建物を利用して開校した。

米軍政は顧問官制度を採択、韓国人を顧問官として登用したが、その中には米国に留学していたキリスト教の牧師や宣教師たちが多く選ばれ、その顧問官の協力により朝鮮神宮の跡地と建物の使用权を米軍政からキリスト教系の団体である韓国キリスト教博物館と韓国神学校が得て、李承晩政権期の1955年まで利用した。

写真2は米軍政期に朝鮮神宮の正殿の跡地に韓国キリスト教の十字架が建てられたと見られる1枚の写真であり、この時期には韓国キリスト教系が利用したと考



えられる。

韓国は、1948年に南韓単独の政府である李承晩政権がはじまり、その時点で南の韓国と北朝鮮とに分けられ、その後、1950年6月25日から韓国戦争が3年間続いた。休戦後、1956年8月15日に朝鮮神宮の拝殿の跡地を利用して李承晩大統領の銅像を建設した。1959年5月15日からは、神宮の中広場を中心に国会議事堂の建設工事が開始され、この2つの工事によって外宮の建物が撤去されたとみられる。

だが、李承晩政権の腐敗により、1960年の4・19学生革命が起り、李承晩大統領が下野するとともに李承晩の銅像を市民と学生が破壊しようとしたが出来ずソウル市によって撤去された。李承晩政権後、新政府が樹立したが、韓国社会は安定せず、1961年の5・16軍事クーデターを招ききっかけとなって国会議事堂建設も中止となり、全ての朝鮮神宮の跡地は南山公園として還元された。

軍事クーデターに成功した朴正熙は、自ら大統領になって南山朝鮮神宮跡地の本格的な開発を進めた。その1つが国会議事堂の予定地であった中広場を利用した南山野外音楽堂建設であり、それは1963年8月5日に完成し、その広場に李承晩政権の最大のライバルであった白凡金九銅像を建設した。さらに、朝鮮神宮の附属建物であった社務所と勅使館の跡地には朴正熙大統領の指示により、1970年10月26日に安重根義士記念館が建設された。この2つの象徴的な建物の建設は、旧政権と朴正熙自らが過去に日本軍将校であった経歴を清算し、自分の正当性を強調するために建てたと考えられる。

以後も朝鮮神宮の跡地は、様々な政策によって利用され開発が行われた。1968年12月には、朝鮮神宮の正殿の跡地に南山植物園の1号館が開設され、その後、続けて2、3、4号館が建てられた。李承晩大統領の銅像が建てられた拝殿の跡地には、1969年6月25日に噴水が建設され、その後、1971年8月15日に植物園の隣に南山小動物園が開園した。参拝所の跡地には、朴正熙大統領の妻である陸英修が1970年7月25日に子供会館を開館し、1970年代までの開発が一幕を閉じた。

今回の報告は、2014年3月29日に開催された『海外神社とは？史料と写真が語るもの—台湾と韓国の事例を中心に—』における筆者の口頭発表をまとめたものである。この発表のもととなった修士論文では、朝鮮神宮の跡地がどのように利用されてきたのかを調査対象とし

て研究を試みた。この場所を、各時代の政権が様々な形で利用してきたことが分かる。韓国人にとってこの場所は、様々な象徴的意味を持っている場所であり、現在もその場所の利用は変化し続けている。

課題としては、「権力の空白期」と米軍政期、李承晩政権期と朴正熙政権期の南山公園開発に関する資料の不足が挙げられる。今後さらなる資料の発見収集と分析が必要となる。

戦後台湾における神社建築の処理政策と金瓜石神社の再利用計画について

林承緯



林承緯氏

本報告はフィールドワーク、文献資料の研究を通じて、金瓜石神社の当時の姿を把握し、約百年前の祭りを再現することで神社の遺跡・建築の再利用を試みた。つまり、無形文化財の視点から有形文化財の活用の可能性を探ったものである。報告の内容は以下のとおりである。

1 戦後台湾における神社建築の処理政策

1. 政府による処理政策

戦後台湾における神社建築の処理政策は、政治情勢や社会環境の変化に伴って進められた。第一段階は1946年1月に行政長官公署が発令した『行政院訓令各縣市政府拆毀日偽及漢奸建築塔碑等紀念物』に基づき、日本から接収した日本資産のうち、記念遺跡や神社などの建築物を社会救済と公益のために改造した（例：嘉義神社→病院）。これに続いて1952年、省政府により日本式の石灯籠、年号を撤去、廃止し、1954年には省政府は景観の妨害にならないもの、また、廃物利用を前提として鳥居、石灯籠などの建築物の改造を許可した。このような政策は日本との断交の影響を受け、1974年に大きな転換を迎えた。『清除臺灣日據時代表現日本帝國主義

『優越感之殖民統治記念遺跡要點』により、各県市政府に現存する神社を全面的に撤去するよう内政部が発令した。このため、台湾全土の神社建築が大規模な破壊を受けた。

2. 処理政策後の神社遺跡

日本統治期、台湾各地に分布した神社の現存状況は、おおむね以下の状態に分けることができる。(一) 本殿撤去、(二) 中国式建築に改造、(三) 神社に国民党の党章を設置、(四) 付属施設を改造、(五) 本殿に別の祭神を設置。今日も残る神社遺跡は、都市部より地方に多く残り、日本仏教遺跡に比べ破壊、改造の度合いが高い。

2 金瓜石神社の再利用計画

1. 金瓜石と金瓜石神社

金瓜石は台湾北部に位置する新北市瑞芳区（旧台北州基隆郡）の金銅鉱山とその集落を指す。当時は東北アジア随一の金山と呼ばれ、非常に栄えた。現在は廃鉱し、主に観光地となっている。また、台湾国内では世界遺産の候補地として挙げられる。金瓜石神社は黄金神社あるいは山神社とも称し、1898年（明治31年）3月2日に創建、大国主命、金山彦命、猿田彦命を祭神として祀った。

2. 金瓜石神社再利用の準備

神社の再利用を実施するために、2項目に分けて準備を行った。その一つは「歴史と信仰の研究」で、金瓜石神社創建背景の解析、分霊元の調査（島根県金屋子神社との関係）、神社と地域の関係（特に炭鉱業）、当時の祭りの実態を把握した。もう一つは「空間と建築の調査」で、金瓜石神社の一代目と二代目の社殿設置場所を解明し、神社施設の全貌を明らかにした。

3 金瓜石神社の再利用計画の実行

神社再利用にあたり、イベントの名称を「縁を結びましょう——金瓜石神社をたずねて」とし、当時の祭りを再現した。イベントの目的として次の3つを設定した。(1) 博物館に対し新たな動態展示を提案、(2) 史跡に触れ、日本文化への理解を深める、(3) 地域の歴史を再現。以上を目的とし、往時の金瓜石神社の祭りを再現することによって文化財の再利用を試みた。無論、この遺跡はもはや神道の宗教施設ではなくなっている。しかしながら、鳥居、石灯笼および社殿の礎石などの基礎は今なお日本の色彩を濃く留めている。これに加え、史料に照らして奉納樽神輿を再現し、無形文化を中心とした文化財再利用を実現した。近年、台湾における文化財



写真3 日本統治期の金瓜石神社



写真4 再現した樽神輿



会場の様子

保護の意識が高まるにつれて、日本統治期の神社建築が有形文化財に指定されるようになってきた。このような動きのなかで、発表者は現存遺跡の保存から無形文化中心の保護、再利用の可能性を思索した。2012年から開始したこの試みは、その過程において生じた効果や課題を踏まえつつ、時間をかけてこの再利用の価値を検証していきたい。